第三章　岩川の弥五郎どんの歴史

第一節　岩川の八幡神社の歴史
第二節　古代・中世・近世の八幡信仰と弥五郎どん
第三節　近代の弥五郎どん祭り
第四節　戦後の弥五郎どん祭り

弥五郎どん（令和元年 11 月５日）

第三章　岩川の弥五郎どんの歴史

第一節　岩川八幡神社の歴史

一　岩川八幡が初めてでき、衰退

今から千年以上前、源氏物語が完成して十年ほどたった万寿二年（一〇二五）に岩川八幡は創建されたという（神社誌下）。

ところが、「その後兵乱により宝品など奪われ衰退」とある。「兵乱」とあるので、島津氏や野辺氏・伊東氏・肝付氏などの「戦乱」を意味するのか、戦国時代に衰えていったのであろう。

二　岩川八幡の再建

次に、戦国時代末期の天文四年（一五三五）に造立した棟札があると、「三国名勝図会」に載っている。檀越藤原重忠・当地頭伴兼豊である。ここでの檀越とは建立者のこと。この藤原氏は、領主の新納氏のことか、連携している肝付氏の勢力かは不明である。

創建から五百年余経っている。まだ、この時代は戦乱の最中なので、放生会や弥五郎祭りのような、大型の祭りはできない時代であろうし、社領を維持するだけでも大変な時代であろう。

三　如来の開眼供養と神社の発展

再建から百五十年後の寛文十二年（一六七二）に別当快宥が末吉郷の三か名（五拾町村・中之内村・岩崎村）から寄付を集めて二年後（延宝二年、一六七四）、京都の石清水八幡宮に行き、「如来」を彫刻させ、鏡（ご正躰四面）を持ち帰り、「開眼供養（仏像に目を描いて魂を入れる儀式）」をした、という棟札がある、と『神社誌下』に書いている。快宥の墓が現在もあるので、別当快宥は間違いなく石清水八幡へ行ったのであろう。

別当寺は鳩嶺山瑞川寺見性院であろう。八幡宮の鳩は神の使いである。その鳩を入れて、山号を鳩嶺山としたのであろう。この瑞川寺の川向かいに、かつての岩川八幡神社や代々宮司を務めた黒岩家の墓地があった。この川（菱田川）には戦後ぐらいまで橋が架けられており、当時も木橋が架けて行き来していたと考えられる。現在、瑞川寺の墓地には大きな墓が三基あり、高さ六尺（一・八メートル）ほどの墓に「貞享三年（一六八六）丙寅三月三日寂　見性院開山法印権大僧都快宥　鳩嶺山瑞川寺」とある。

快宥の墓

別当とは八幡神社での僧ではあるが、社司（今の神主）のような役をしたのではなかろうか。神仏混淆（神も仏も入り混じって、一つになったという考え方）の時代で、大きな神社には、神宮寺というお寺が必ずあるので、僧侶がいて当然である。そこで、別当快宥は三つの村を回って、寄付を集めてから、京都の石清水八幡宮へ行き、阿弥陀如来像を彫刻してもらい、他に四面の「鏡」を「ご正躰」として持ち帰っている。

「四面」というので、鏡のようである。現在、神社には6面の鏡があり、延宝二年銘の鏡は四面存在するが、どれも紐で掛けるようになっているので、これはご神体ではないであろう。別に大きな鏡の裏に梵字のキリーク（阿弥陀如来を表す）があるので、これがご神体ではなかろうか。石清水八幡宮の本地仏とも一致する。しかし、「開眼供養」をしたというので、彫刻された阿弥陀如来像がぴったりである。しかし、如来像は明治

初の廃仏毀釈にあって、壊されたか、焼かれたと思われる。現在は存在しない。

石清水八幡を選んだのは、宇佐八幡宮は敵対関係なので、九州なら筥崎八幡であろうが、それを超えて、京都の石清水八幡へ結びつきを求めたのであろう。国分八幡（現在の鹿児島神宮）を避けたのは、すぐ近くの投谷八幡が国分八幡の東の方の支社、蒲生八幡が西の方、栗野の正若宮八幡宮（勝栗神社）が北の方、鹿児島の荒田八幡が南の方の支社となっているので、国分八幡との結びつきは避けたのであろう。

石清水八幡宮の放生会が再開されるのは、五年後の延宝七年からなので、快宥らは石清水八幡宮の放生会は実際には見ていないことになる。

岩川八幡神社の順調な発展は、この時期からとした方がよいのではなかろうか。

キリークのある御神体

四　社司の黒岩家

延宝二年から五十年ほど時代が下った享保四年（一七一九）、この時に亡くなった黒岩元秋和泉守（いずみのかみ）（位牌から）、元体石見守（享保六年〈一七二一〉の裁許状から）、延享三年（一七四六）没の元正石見守以下黒岩家は続いていく。黒岩家は「元」の文字が付く名前である。元家右近が二十六代としているが、これは黒岩家としての二十六代目であって、岩川八幡を預かって二十六代目という訳ではない。元秋から少なくとも四代経っているので、最初に出てくる元秋は二十一代に当ることになる。明治四年の元次が三十一代で、三十二代厳彦氏まで十二代黒岩氏は大正末年まで勤めた。伊勢氏と交代してからは世襲ではなく、十代ほど交替しながら続いている。

黒岩家歴代当主

代	名	別称・官位名等	備考
	元秋	和泉守	享保四年六月没
	元体	石見守	
	元正	石見守	延享三年三月没
	元晴		
二六代	元家	右近	宝暦三年七月没
三〇代	元常	隼人守	文政五年七月没
三一代	元次	元一　市正	明治四年正月没
三二代	厳彦		大正十一年五月没

五　弥五郎どんの始まり

明和五・六年一七六八年ごろ、二十六代を表明する黒岩元家の代には弥五郎どんは存在する。元家より前、どのくらいさかのぼれるか、であるが、快宥の代は、京都の岩清水八幡との本社・末社と阿弥陀如来や鏡が中心で、弥五郎どんまでは考えていないのではなかろうか。

弥五郎どんは黒岩家の時代に入るころから始まったのかもしれない。

浜下りは神社から一町先の川の先端まで弥五郎どんを引いていた。それが明治後、八幡橋を渡って、町の方へ引っ張ってきている。

なお、個人の記録で確認できる史料として、安永六年（一七七七）の「五拾町村・中之内村山野見懸日帳」（山口文書）に、「十月五日　曇　今日、祭礼ニ而、見懸方

弥五郎どん祭りと思われる記述（五拾町村・中之内村山野見懸日帳）

休ニ而候」と記述がある。弥五郎と明確には記されてはいないが、この「祭礼」は、弥五郎どん祭りのことを指すと考えられ、当時、仕事が休みになるくらい規模の大きな祭りだったようである。

六　岩川八幡の社地

最初は字川崎（元八幡）という、前川と菱田川に挟まれた平坦な地の縦横百間（一八二平方メートルほど）の境内を持っていた。鞘堂（神殿を風雨から防ぐための堂）である茅葺きのお堂の中に、小板葺き（平木みたいな板木で葺いた屋根）の神殿が入っていた。拝殿は神殿の前にあり、近くに神舞を舞う舞殿があった。木の鳥居は、高さ約七メートル、随神社（仁王と同じ役目。門守）に御供所（供え物を準備する所）もあった。

大正三年九月一日に現在地に移った。理由は、前川と菱田川に挟まれていて、大水が出ると危険、また、道路も不便であったからだ。

現在地は、大昔の岩川城の跡であり、熊野神社があった。だが、その前の明治四十三年三月に、熊野神社は岩川八幡へ合祀しているので、跡地であった。合祀したのは熊野神社だけではなく、新田場の伊勢神社・竹山の藤原神社・折田の笠祇神社・西山の宇佐神社・保食神社と合計6社あった。合祀とは別の神社に神を移すことで、社殿を壊す場合と、社殿を残す場合とがある。

社地は狭かったので、昭和十年、社殿改築前に地面を掘り下げて境内を広くした。坂の中央をコンクリートにしたのは昭和四十五～四十六年頃であった。

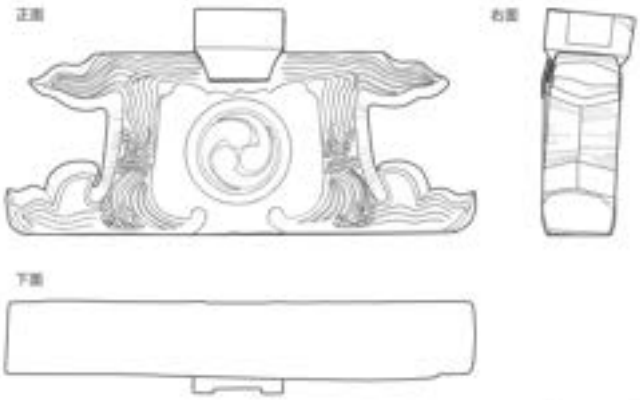
なお、元八幡時代の蟇股・斗栱の一部が現存している。これらには、「明治十四年巳旧十月二日」「戸長大津十七」「祠官黒岩巌彦」「大工　東仲兵衛　井ノ上喜左衛門」といった墨書が散見され、当時を偲ばせる資料である。

元八幡

昭和10年頃の岩川八幡神社

元八幡の蟇股・斗栱

墨書



三つ巴紋の蟇股測量図

七　現在の社殿と祭神・祭日

昭和十三年十月十四日に社殿改築の落成式を行った。現在の社殿はその時のものと社務所を新たに広げている。

祭神は、快宥が持ってきた時代から、キリークの鏡か阿弥陀如来であったろう。ところが、明和五・六年（一七六八）ごろの弥五郎が活躍している時代になると、考えることが変わって、祭神は弥五郎か武内宿祢ではと「三国名勝図会」には書いている。

現在では、主祭神は応神天皇、副神は七神（合祀の祭神も含む）で天照大神・神功皇后・伊邪奈岐大神・玉依姫・仲哀天皇・保食神・武内宿祢命と計八神を祭っている。

天神七代に入る神は、伊邪奈岐大神。地神五代に入る天照大神。玉依姫は彦火火出見尊の母 木花開耶姫の妹。保食神は食べ物の神。仲哀天皇は日本武尊の第二王子で、皇后は神功皇后。神功皇后の第四皇子が主祭神の応神天皇となっている。武内宿祢命は十二代から十六代の天皇に仕えたという。この内、天照大神・伊邪奈岐大神・保食神社は合祀した神社の神に当たるようだ。

神職は大正末まで黒岩氏で、その後、伊勢健十郎（三十三代、大正末～昭和十一年）・川崎竜助（三十四代）・堀良一（三十五代）・藤井武志（三十六代、戦後）・鮫島利雄（三十七代）・原田藤徳（三十八代）・山口長森（三十九代）・穎川勝英（四十代）・谷川正文（四十一代）・後藤大志郎（四十二代）・西留正昭（四十三代）氏と最近は短期間で変わっている。

現在の岩川八幡神社

氏子は約二千戸、特に「宮仕」という、幕末から世襲で神社に奉仕する人が十人いる。大きい神社では、県内でもあちこち「社人・社家」という神社に奉仕する人たちがいるので、宮仕は社人と同じであろう。

八　現代化への動き

昭和三十年までは、九電が電線を切っていた。まだ洗濯機の出始めで冷蔵庫もない時代だったからだ。次に、電線を持ち上げるT字型の長い竿ができた。

昭和三十五年、馬場集落の青年が少なくなって、同好会を作った。昭和四十年か四十九年に商工会青年部に移った。昭和五十一年に木の台車から自動車に変えた。それで、鉄骨に変った。木の台車のときは、キイキイ鳴って、方向を変える時はテコを使った。キイキイ鳴る方がよかった、という人もいた。

弥五郎どんを引くのは、木の台車の頃は中学生もひいていた。それが小学六年生に変った。昭和の時代である。それまでは東馬場と上馬場の子供たちが引いていた。それが、岩川小の五年生男子へと変わって、現在もそれは続いている。

祭日は旧暦十月五日であった。それを月遅れの十一月五日を例祭日とし、昭和四十八年から弥五郎どん祭りだけを十一月三日とし、三日から五日まで弥五郎どんは境内に展示し、五日の例祭が終わってから取崩し、収納することにしている。毎年作っている頃は、神社の裏山に捨てていた。

第二節　古代・中世・近世の八幡信仰と弥五郎どん

霧島市立隼人歴史民俗資料館保管『大隅鹿児島神社旧記写』（以下、『旧記写』）（注1）には、「神事之祓書」に「八月十五日　放生大会祭リ　御神楽」の項があり、近世の南九州における八幡信仰の中枢において、隼人と弥五郎がどのように理解されていたかを示す格好の例である。この項には以下のような内容が見られる。

人皇十二代景行天皇の御代、大隅国隼人という者は、王命に随わず、勇敢にして力は極て多く一族らは数千人に及ぶ。天皇は親征したが利を失って大隅宮に数年滞在し、終にこれを滅ぼした。その後、隼人の神霊が世上に祟りをなした。これを宥めるために神事を起した。

一本には、火闌降命を隼人命を言う。この神の後胤は日向・大隅・薩摩で繁昌した。故にこの三州より上る者を隼人と唱えるのである。仁王四十四代元正天皇の時代の養老四年、大隅日向隼人らが乱を起した。勅命に依り、豊前守宇努首男人が将軍となり、神軍を率いて下向し、八幡神に祈りこれを討った。数多の隼人が命を落とした。よって、（放生大会祭は）その怨霊を慰めるための祭である。

景行天皇の時代、火国の球摩田彦命は王命に伏さなかった。これを征ち、次に大隅隼人を討った。この隼人を大人弥五良という。その形は鬼のようで、上井の城に引き籠って大石大木を落して官軍を悩ませた。そのため、天皇は大神に祈り、橋の上で神楽を奏たので、大人は忽然と姿を現し、この時これを討取った。この鉾を早風社と言い、この橋を拍子橋と言う。この大人は世上に祟りをなしたので、日州・隅州の一帯では、弥五良殿の祭は夥しい。日州の摩戸野（的野）八幡は弥五良殿である。元明帝の和銅元年に建立と言われている。また、当（正八幡）宮にも大人退治大ノ祭というものがあり、野口で執り行わせている。養老四年の隼人の祭りは、当（大隅）国ではその例を聞かない。上井城に大人が住んだ古跡の岩屋が有る。

これから述べるように、歴史的事実とはかなり異なるところはあるものの、八幡信仰と隼人、弥五郎は密接な関係を持つものとして理解されていたことがわかる。以下、古代・中世・近世の八幡信仰の展開と、南九州の関わりを概観していく。

（注1）『旧記写』は桑幡家旧蔵の史料で、『大隅鹿児島神社旧記写』（一九三九年、紀元二千六百年鹿児島県奉祝会が出版）あるいは同系統本の抄出本である。後者は、凡例によれば、寛永五年（一六二八）八月十五日に写されたものを、天保八年（一八三七）に谷口氏によって書写されたものである。

一　八幡とは

史料上、八幡の初見記事は、『続日本紀』天平九年（七三七）四月乙巳朔条の、新羅を調伏するために使を伊勢神宮・大神社・筑紫の住吉・八幡・香椎宮に派遣した記事である。また天平十二年（七四〇）の藤原広嗣の乱に際して、大将軍大野東人に鎮圧を八幡神に祈らせた。このように、八幡神は、正史（政府編纂の歴史書）には武神として登場する。

豊前地域は、古墳時代にはヤマト国家の九州支配の最前線であり、『日本霊異記』や最澄の六寺院（六所宝塔）の建立計画から、九世紀前期の段階でも豊前国の境界性が意識されていたことが知られる。八幡の社の創建は、和銅年間（七〇八～七一五）前後とされており、これは政府と隼人との軍事的衝突が起こっている最中であり、律令国家の成立とともに国境の神として政治的に成立するとされる（飯沼　二〇〇四年）。

八幡について、『八幡宇佐宮御託宣集』（以下『託宣集』注2）巻三に「辛国城に始めて八流の幡と天降りて、我は日本の神と成れり。」、「神日本磐余彦尊御年十四歳の時、帝釈宮に昇り、印鑰を受け執り、日州辛国城に還り来たまふ。蘇於峯是なり。蘇於峯は霧嶋山の別の号なり。」、「私に云く、隅州辛国城は応神天皇の御影霊向根本の地なり。」とある。これは、いわゆる中世神話の類いに属するものであるが、辛国城＝蘇於峯（曾乃峰）＝霧島山とされており、八幡神と大隅国との関係が示されている。なお、「日州（日向国）辛国城」は、大隅国が日向国から分出されたこと、あるいは霧島が日向国の式内社とされていたことによると思われる。

（注2）『託宣集』は、宇佐神宮の社僧神吽（一二三一～）が、宇佐神宮、八幡神の古記録、託宣などを集成したもので、正和二年（一三一三）に選修された。

二　隼人の戦いと豊前国

政府は、天武十一年（六八二）に本格的な朝貢を開始した隼人を夷狄として位置づけ、朝貢隼人や移配隼人を受け入れるための隼人司を設けた。政府は、文武二年（六九八）に南島へ覓国使を派遣して調査させたが、覓国使は翌年七月・十一月に帰朝するまでの間に、薩摩地方、衣地方、肝付（肝属）地方の隼人の有力者によって襲撃されていた。

『続日本紀』大宝二年（七〇二）八月丙申条によれば、政府が、薩摩・多禰（種子島）で軍事行動を起こして、戸籍作成と官人の任命を開始した。同十月丁酉条には、戦勝を祈った大宰府管内の神々九社に幣帛を奉ることによって、この祈願成就に報いたとの記事がある。

「大宝二年豊後国戸籍」上三毛郡塔里に勲十一等塔勝岐弥、「大宝二年筑前国戸籍」の島郡川辺里に勲十等葛野部長西が見える。勲位は大宝二年の隼人の戦いによって与えられたものであり、豊前国・筑前国からも兵力が動員されていたことがわかる。こうしたことから、戦いに際して戦勝を祈った大宰府管内の神々九社の中に、豊前の神が含まれていた可能性は高いが、それが（原）八幡神であったか否かは定かでない。

和銅六年（七一三）四月に政府は、丹後国・美作国とともに、日向国の肝坏・贈於・大隅・姶羅の四郡を割いて、大隅国を設置した。七月には、対隼人戦争で戦功のあった一二八〇余人に、功労に応じて勲位を授けた。そして翌年三月には豊前国から二〇〇戸の移民を行った。『和名類聚抄』によれば、大隅国桑原郡には、豊国郷・大分郷・仲川（大隅国では中津川と表記）郷が見え、大分郷は豊後国大分郡からの移民であろうから、豊後国からの移民も行われたと考えられる。

『延喜式』神名帳には、嚼唹郡に韓国宇豆峰神社が見え、韓国は辛国に通ずると考えられる。これは、先にみた八流の幡が降ったという辛国城と関係がある。曾於郡から桑原郡を分出する際、広瀬川を郡境としたため、分出後の曾於郡側にも、移民が居住しており、彼らが奉斎する神社が韓国宇豆峰神社であった。こうした移民政策は、大隅国内の緊張を高め、養老四年には最大規模の軍事衝突が起こっている。

養老四年（七二〇）二月に、隼人による大隅国守陽侯麻呂殺害事件が起き、三月に中納言大伴旅人を征隼人持節大将軍とする一万人以上からなる征隼人軍が編成された。大宝二年・和銅六年の征隼人軍は、大宰府首脳を司令部としていたが、大隅国司殺害事件を発端とする養老四年の戦いでは政府首脳が直接率いる征隼人軍が編成された。これには、大宰府管内諸国の軍団が国司・郡司に率いられて参戦したと考えられる。

「天平九年（七三七）豊後国正税帳」に勲十等の日田郡大領日下部連吉島、勲十等の少領日下部君大国・主帳日下部君、勲九等の玖珠郡領国前臣龍麿、勲十等の主帳生部宮立などが見えており、勲位を得る機

会としては養老四年の対隼人戦争の可能性が高い（竹森・永山・原口二〇一九）。

三　八幡神と神仏習合

八幡神の誕生は、この養老四年の対隼人戦争の前後で、すでに宇佐に出現していた境界神としての原八幡神と大隅国の辛国城に八流の幡として天降った原八幡神が結合した八幡神として姿を現したとし、また豊前国で活躍していた僧法蓮が、大宝三年と養老五年にその医術を褒賞されのは、いずれも大宝二年・養老四年の対隼人戦争の直後であり、隼人を多く殺傷したことによって引き起こされた病を治療したことがその理由であり、その治療法は仏教的な発想による放生であったとする説がある（飯沼　二〇〇四）。

『政事要略』巻二十八の「石清水放生会」の項は、八幡神が隼人を多く殺してしまった報いとして、毎年放生会を催すのであり、これは宇佐宮より興って、石清水宮に伝わったとしている。また、天平十三年（七四〇）の藤原広嗣の乱での勝利に対して、翌年政府は、八幡神宮に秘錦冠一頭・金字最勝王経・法華経各一部、度者一〇人・封戸・馬五疋を与え、三重塔一区を造らせた。これは、直前に発出された国分寺建立と同じく、鎮護国家の思想を背景にするものである。このように、八幡神は初源期から仏教と深く関わりを持っていた（飯沼　二〇〇四）。

天平勝宝元年（七四九）十二月、八幡大神の祢宜尼である大神杜女は、孝謙天皇・聖武太上天皇・光明皇太后と共に東大寺を拝し、八幡大神には皇族に与えられる最高位である一品、比咩神には二品が与えられた。八幡大神は最初から最高位を与えられたことになる。八幡大神に一品が与えられた背景には、この時点で八幡の主神が応神天皇であるとする認識が存在したとする説（中野　一九八五）がある一方、漠然と天皇霊との関係が意識されており、のちにこれは聖武太上天皇と結びつけられ、承和十一年（八四四）までには、八幡大神を応神天皇霊とする認識が一般的になったとする説（飯沼　二〇〇四）もある。

天平勝宝二年（七五〇）二月一品八幡大神に対して、三八〇戸を加えて計八〇〇戸の封戸と、三〇町を加えて計八〇町の位田が与えられ、二品比売神に対しては六〇〇戸の封戸と六〇町の位田が与えられた。

八幡大神・比売神は、神々の中で最高の位置づけを得たのであったが、天平勝宝六歳（七五四）の薬師寺僧行信の厭魅事件に際して、大神杜女と大神多麻呂が共謀したとして、両人は流罪となった。翌年八幡大神は、託宣して、封戸一四〇〇戸と位田一四〇町を朝廷に返上した。また、この罪により社殿が穢されたため、十数年にわたり、四国宇和峰に遷ったとされる。

天平宝字八年（七六四）藤原仲麻呂の乱鎮圧後、八幡大神に封戸二五烟が与えられ、八幡神の復権が始まった。天平神護二年（七六六）四月神の願いによって、比咩神に六〇〇戸の封戸が与えられ、十月多麻呂・杜女が許されて、復位した。神護景雲元年（七六七）九月には、八幡比売神宮寺の造営が始まった。神護景雲三年に多麻呂や大宰主神習宜阿曽麻呂、大宰帥弓削浄人（道鏡の弟）が実働部隊となり宇佐八幡神の神託を利用して道鏡の即位が謀られたが、これは同じく宇佐八幡神の神託を用いて和気清麻呂らによって阻止された。

『続日本後紀』天長十年（八三三）十月戊申条には「景雲の年に八幡大菩薩が告ぐる所」とあって、神護景雲年間（七六七～七〇）に八幡大神に菩薩号が奉献された。天応元年（七八一）に宇佐宮では、新社殿を建設し、延暦十七年（七九八）十二月二十一日の太政官符で封戸一四一〇

戸に復しており、いわゆる大同元年（八〇六）牒（『新抄格勅符抄』）によれば八幡神の封戸は一六六〇戸とされていた。

弘仁十四年（八二三）に、大宰府符によって八幡大菩薩宮の「大帯姫細殿一宇」が新造された。大帯姫は神功皇后のことで、このころ新羅海賊への対応が大きな問題となっており、大宰府の主導で、対新羅神としての神功皇后が祀られることになった。比咩大神は応神天皇の妻神とされ、また新たに祀られることになった若宮は応神天皇の皇子・皇女（若宮・若姫・宇礼・久礼の四所）とされた。この若宮は、大菩薩化によって失われた八幡神の軍神としての性格を受け継ぐとされている（飯沼二〇〇四）。

『石清水八幡宮護国寺略記』によれば、貞観元年（八五九）に宇佐八幡宮に参詣した大安寺僧行教は、八幡大菩薩より鎮護国家・仏教興隆のため都近くに移座したき旨の示現を得て、神体を奉じた行教が山城国の山崎の男山に至った際、ここに鎮座するという示現が下った。これより先に、天皇・皇后らが男山に新しい神が降臨したとの霊夢を見ていたため、行教の奏上をうけて、すぐに拝殿・本殿の建設が始まり、まもなく畿内明神七社の一つとなり、勅使が派遣され奉幣に預かるようになった。その後も、石清水八幡宮寺の地位は上昇を続け、延喜十六年（九一六）には、上下賀茂社を凌いで畿内第一位となった。そして、伊勢神宮と並ぶ皇祖神＝「宗廟神」とされていった（伊藤　二〇一六）。

天慶三年（九四〇）に、義海（宇佐宮神官宇佐氏、石清水八幡宮第二代検校）が天台座主に就任した。長保元年（九九九）に、元命は宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺講師になった。長保六年には宇佐宮と対立した大宰帥平惟仲が罷免されており、宇佐宮の権威が非常に高かったことが分かる。寛弘年間（一〇〇四～一二）に藤原道長は、弥勒寺境内に喜多院・法華堂・常行堂を建立した。長和三年（一〇一四）、石清水八幡宮の少別当に転じていた元命は権別当となり、治安三年（一〇二三）には、石清水八幡宮別当となった。

四　九州における八幡宮の展開

宇佐八幡宮に次いで、寛平九年（八八九）筑前国穂波郡の大分八幡宮が創建され、これが移されて延長元年（九二三）に筑前国那珂郡の筥崎八幡宮が創建された。創建期は明確でないものの、一〇世紀に成立していたものとして豊後国大分郡由原八幡宮、肥後国の藤崎八旛宮、肥前国の千栗八幡宮があり、一一世紀前半には筑後国高良社に八幡神が合祀され、大隅国正八幡宮、薩摩国新田八幡宮が成立していった。一二世紀末には、これらのうちの筑前国大分八幡宮・肥前国千栗八幡宮・肥後国藤崎八幡宮・薩摩国新田八幡宮・大隅国正八幡宮が五所別宮とされることになった（日隈　二〇一六）。

西海道諸国の主な八幡宮及び社領分布図（日隈　2016）

五　南九州における八幡宮の展開

『延喜式』神名帳には、大隅国に五座、桑原郡に大座の鹿児島神社、囎唹郡に小座の大穴持神社・宮浦神社・韓国宇豆峯神社、馭謨郡に小座の益救神社、薩摩国に二座、頴娃郡に小座の枚聞神社、出水郡に小座の加紫久里神社が見えている。一〇世紀前期の『延喜式』段階で、南九州に八幡社は見えない。

「石清水宮璽御笠事」紙背文書によれば、石清水八幡宮別当元命が、大宰府により大隅国内の八幡別宮支配権を認められており、長元七年（一〇三四）までには、鹿児島神社は八幡宮化していたことがわかる。また、「同宮（八幡新田宮のこと）司等進宰府申文在外題」（『石清水八幡宮史　史料第四輯』一九三四年　一五三頁）によれば、長久三年（一〇四二）～永承五年（一〇五〇）の間に新田宮が八幡宮化した（日隈二〇一六）。鹿児島神社・新田宮が八幡宮化した契機は、長徳元年（九九七）・寛仁四年（一〇二〇）に起こった南蛮（奄美島人）襲来事件や長元元年（一〇二八）に島津荘の開発者と目される大宰大監平季基による大隅国府焼き討ち事件にあったと考えられ、これを受けて軍神としての八幡神が勧請されたものと考えられる（日隈　二〇一六）。

これに関連して、大隅国の場合、なぜ豊前国からの移民が奉斎し『延喜式』神名帳に載せられていた韓国宇豆峯神社を抑えて、鹿児島神社の八幡宮化が行われたのかという問題がある。八世紀代から鹿児島神社で八幡神が祀られていたとする説（栗林　二〇一六b）があるので、これについて考えてみる。

先述したように、豊前国等からの移民は韓国宇豆峯神社を奉斎していた。天平神護二年の桜島噴火に際して神造島が生まれたが、これを生んだ神について、律令政府側は、国造りをして国土を完成させたとされる大穴持神と判断し、これを官社とした（『続日本紀』宝亀九年（七七八）十二月甲申条）。鹿児島は、桜島の古名であり、鹿児島神（桜島）への信仰は広汎に存在したから、大隅国にも薩摩国にも鹿児島神社が存在した。「職員令」によれば、国守の職掌の最初に「祠社」が挙げられており、鹿児島神社は、政府側が在地の桜島信仰を神社としたものであろう。神格としては年代的にみて、在地に根ざした桜島信仰による鹿児島神、豊後国からの移民が持ち込んだ韓国宇豆峯神、神造島に関して律令政府が持ち込んだ大穴持神の順に成立したと考えられる。

地方の有力社は国司の介在のもと「官社」となるとともに、中央政府（神祇官）は官社化を通じて、地方の霊験ある神社をその管轄に入れるという相互関係が成立したとされる（早川　二〇一八）。鹿児島神社は桜島を祀っていることによって、大隅国の中で最も重要な位置づけをされ、『延喜式』神名帳では、日向・大隅・薩摩三国で唯一の大社とされていた。大隅国守が、最も深く関与していたのが鹿児島神社なのであって、大隅国側が主導して鹿児島神社に八幡神を勧請した可能性も大きいと考える。一一世紀中期以降の大隅国と正八幡宮との強い結びつきもこれを裏付けると思われる。

長久年間（一〇四〇～四四年）に大隅国司が、姶良庄を正八幡宮に寄進した（「桑幡家文書」暦応二年（一三三九）十一月日付正八幡宮講衆・殿上等訴状写）。また「大隅正八幡宮神社次第写」（「桑幡家文書」年不詳）は、大隅正八幡宮の末社を成立順に書き上げたものと考えられており、これによれば、姶良庄（現在の鹿屋市）・荒田庄（現在の鹿児島市）・栗野院（現在の湧水町）・蒲生院（現在の姶良市）・鹿屋恒見（現在の鹿屋市）・吉田院（現在の鹿児島市）・加治木（現在の姶良市）・祢寝院（現在の錦江町）の順に成立し、大隅正八幡宮領は大隅国全域から、薩摩国にも拡大した。

こうした動きは、大宰府との軋轢を強め、寛治元年（一〇八七）には大宰大弐藤原実政による正八幡宮神輿射撃事件が起こるが、最終的に実政は解任、伊豆へ配流され、正八幡宮は中央政府から重要視されることになる（日隈　二〇一四）。この年、大隅国司の父のもとに下向した行賢は、のちに正八幡宮執印となった。この時期、正八幡宮の中世的宮家機構が整えられていった（栗林　二〇一六a）。

摂関家では藤原忠実（一〇七八～一一六二）が、長治二年（一一〇五）ようやく堀河天皇の関白に任じられた。嘉承二年（一一〇七）鳥羽天皇が即位すると、摂政となったが、一貫して白河上皇の風下に立っていた。忠実側は、大隅国司の支配に反発する在地領主たちに働きかけて、大隅国内で島津荘寄郡を拡大していった。一二世紀初期、串良院・肝付郡・曽野郡・小河院・禰寝北俣・鹿屋・財部院・深河院・種子島などを島津荘寄郡としたり、その域内に島津荘寄郡を設置していった。さらに帖佐郷が、藤原忠実の所領となった。保安元年（一一二〇）、忠実は、その娘の鳥羽天皇への入内問題で白河上皇の怒りをかって内覧を停止され、事実上失脚した。忠実失脚中の時期、大隅国内の島津荘寄郡域化の動きは鈍化した。保安年中（一一二〇～一一二四）に忠実は帖佐郷を大隅正八幡宮に寄進しており、これは大隅国内における島津荘寄郡域拡大により激化した大隅国司・大隅正八幡宮との対立を緩和し、関係改善を図ったものと考えられている。大治四年（一一二九）鳥羽院政が始まると、天承二年（一一三二）正月忠実は内覧になり政界に復帰した。これによって、島津荘寄郡化の動きが再び進んでいったと考えられる（日隈　二〇一四）。

建久八年（一一九七）に作成された「大隅国図田帳」には、「島津庄殿下御領　地頭右衛門兵衛　新立庄七百五十丁（中略）保延年中以後新庄、国務に随はざる也。」という記載がある。一二世紀中期の鳥羽院政期になると、荘園整理は行われなくなった。在地領主たちは、保延年中（一一三五～四一）以降、国衙の政治的圧迫や大隅正八幡宮の支配などから逃れるため、所領を寄郡として摂関家の藤原忠実に寄進していったようで、こうした新立荘は国務に従わない状況になった。

忠実の失脚中に、大隅国司や大隅正八幡宮は大隅正八幡宮領を拡大させていき、藤原忠実が復権したタイミングで石体事件が起こった。これは、天承二年（一一三二）正八幡宮御殿の東北にある宮坂の麓に「八幡」と刻まれた二基の石体の出現が、政府によって、崇徳上皇と中宮藤原聖子（忠実女）との間に皇子が誕生する瑞兆と判断されたものである。

大隅国司は同年、万善村（桑東郷内）の田七町を四季転読大般若経料米料所として正八幡宮に寄進した。このころ、成立した『今昔物語集』の巻十二「石清水において放生会を行なふ語第十」には、八幡神はまず大隅国に現れて宇佐に遷り、最終的に石清水に垂迹したとする説が見え、これは正八幡宮を宇佐・石清水の上位に位置づけるものである。この時期、宇佐八幡宮は摂関家の支配下に入っており、宇佐弥勒寺も摂関家と深い関係のある石清水八幡宮寺の支配下に入っていた。石体事件は、政界に復帰した忠実による摂関家領荘園島津荘域拡大を抑制し、大隅国司の支配領域を維持するため、大隅国司と深い関係を有する大隅国一宮正八幡宮の宗教的権威を高める意図で、大隅国司と正八幡宮が結託して起こされた事件であったと考えられる（日隈　二〇一一）。

六　中世の八幡信仰

清和源氏の源頼義（九八八～一〇七五）は、八幡神を篤く信仰し、石清水より八幡神を勧請し、鶴岡八幡宮が成立した。八幡神は、源氏の氏

神とされたことから、鎌倉幕府の御家人たちもこぞって八幡神を所領等に勧請し、八幡信仰はいっそう全国化していった。二度にわたるモンゴル襲来以降、八幡霊験譚としての『八幡愚童訓』がまとめられている（新井　二〇二二）。

二度にわたるモンゴル襲来に際して、全国の様々な神仏へ怨敵降伏の祈願・祈祷が行われたが、軍神としての八幡神への期待は高かった。幕府も異国降伏祈願のため諸国一宮に神馬一匹・剣一腰を奉納するが、正応六年（一二九三）幕命を受けた守護島津忠宗は当時薩摩国一宮の座をめぐって係争中の開聞宮（現枚聞神社）と新田宮のいずれかを一宮と定めることなく、近例によりとりあえず新田宮に奉納した（同年四月二十日「島津忠宗施行状」新田神社文書）。しかしこの実績は新田宮の一宮認定に大きな力となったといってよい。この際、新田宮が八幡神を祀っていたことも重要な要因であったと思われる。

鹿児島県内の八幡神を祀った神社は、二〇一六年段階で一九八社あり、栗林文夫氏がこれを分析している。荒田八幡宮（荒田荘）、八幡神社（正八幡宮、吉田院）、八幡神社（祁答院）、八幡神社（姶良荘）、勝栗神社（正若宮八幡社、栗野院）、蒲生八幡神社（蒲生院）、八幡神社（岩下八幡神社、加治木郷）や八幡神社（伊集院下神殿）、松山神社（正若宮八幡社、日向国救仁院）は、これらが所在する院・郷が正八幡宮領化する一一世紀から一二世紀にかけて集中的に勧請されたものと考えられる。勧請された八幡神社の本社は、宇佐八幡宮が七社、石清水八幡宮が五社、鶴岡八幡宮が六社、筥崎八幡宮が五社、正八幡宮が四社、八幡新田宮が三社、蒲生八幡神社が一社、廣田八幡（摂津国）が一社となっている。また、勧請された年代が分かる四七社については、鎌倉時代一二社（二五・五パーセント）、室町・戦国時代一〇社（二一・三パーセント）、平安時代七社（一四・九パーセント）、南北朝時代六社（一二・八パーセント）、江戸時代五社（一〇・六パーセント）、奈良時代以前三社（六・四パーセント）、奈良時代二社（四・三パーセント）、明治時代二社（四・三パーセント）となるという。そして、「鹿児島県の場合、古い八幡神はもちろんあるのだが、それよりも武家政権発足後、武士により八幡神が勧請されていくという傾向と軌を一にしているのではないか」とする（栗林　二〇一六a）。

七　弥五郎どんと御霊

御霊信仰とは、『国史大辞典』（第六巻　吉川弘文館　一九八五年、柴田実執筆）によれば、「非業の死を遂げたものの霊を畏怖し、これを慰和してその祟を免れ安穏を確保しようとする信仰。原始的な信仰心意にあっては死霊はすべて畏怖の対象となったが、わけても怨をのんで死んだものの霊、その子孫によって祀られることのない霊は人びとに祟をなすと信ぜられ、疫病や飢饉その他の天災があると、その原因は多くそれら怨霊や祀られざる亡霊の祟とされた。（下略）」とあり、隼人を多く殺したことから始まったとされる放生会は、一種の御霊信仰の現れと言える。弥五郎の「五郎」は御霊のことであるとされる（柳田　二〇一三）。

湧水町の勝栗神社（正若宮八幡社）には、「正若宮八幡大菩薩御宝箱十王之絵箱」の上蓋裏に、「寔永正十二天乙宍仲春十王講之結衆之事次第不同　本願　弥五郎殿」とあり、弥五郎面の裏面に「正若宮八幡之神兵人之面再興之事、于時天文十九年八月時正日（下略）」とあって（森田二〇〇七）、戦国時代には、弥五郎殿信仰が確認できる。

さらに、『旧記写』よれば、大人弥五郎を討った鉾は早風社となり、これは国分八幡宮（鹿児島神宮）境内の隼風宮のことである。『三国名勝図会』巻三四の戸上（とがみ）六所大権現社の項には、隼風神社が祀られており、また「御幸の式」があったが、慶長の中頃で廃れたという記載がある。同

巻三一には、野口村枝之宮は、隼人あるいは大人弥五郎を埋めて祀ったとある。さらに、弥五郎・大人の伝承地については、矢口一九七八、森田二〇〇七、中島二〇一一、勝目二〇二三にまとめられている。それらによれば、南九州における弥五郎伝説・大人伝説・足跡伝説・畚(ふご)譚・跨ぎ譚などは、曽於市、霧島市、鹿屋市、志布志市、姶良市、さつま町、薩摩川内市、日置市、湧水町、阿久根市、鹿児島市（以上鹿児島県）、都城市、日南市、宮崎市、川南町、都農町、新富町、西都市、延岡市（以上宮崎県）で確認されるという。

おわりに

八幡神は、外来神として宇佐に現れ、対隼人戦争の中で、軍神としての性格を強めた。隼人の霊を宥めるため、放生会が始められ、これが八幡宮の最も重要な祭礼となった。また盧舎那大仏造立に大きな役割を果たし、封戸の数では他を圧倒する一六六〇戸を与えられた（注3）。九世紀半ば過ぎには、石清水八幡宮が成立し、天皇家・摂関家の尊崇を集めた。大隅国では、南蛮襲来事件や大隅国府焼き討ち事件を受けて、桜島を祀っていた鹿児島神に八幡神が勧請され、一一世紀前期には大隅正八幡宮が成立した。清和源氏が氏神としたことから、八幡信仰は鎌倉幕府の成立すると全国化し、モンゴル襲来後さらに盛んになった。

弥五郎は、隼人の御霊とされ、『旧記写』に「日州・隅州の一帯では、弥五良殿の祭は夥しい。」とあり、各地に弥五郎関係地名があるように、対隼人戦争の舞台となった南九州では広く信仰の対象となった。『日州神社考』（注4）の「板敷村　田上八幡宮」の項に「往昔、大隅国桑原郡〔或は梅木田〕の稲積弥五郎という人は、彼の国の一宮八幡八幡宮の御神体を背負い奉って、神鏡・御太刀を日向国那珂郡飫肥の四戸ケ野にお祀りし（下略）」、とあって、弥五郎は八幡神に奉仕する存在であり、弥五郎は大隅国に出自すると伝承されていた。

曽於市岩川八幡神社と宮崎県山之口町的野正八幡宮、宮崎県日南市田ノ上八幡神社の弥五郎人形や日置市八幡神社の大王殿の祭りにはいずれも大型の竹人形が登場する。これは、九州北部に色濃く分布する山鉾屋台の出る大規模な都市祭礼の影響を受けたものとも考えられている（段上　二〇〇七）が、なぜこの四つの神社が「人形山車」を受容し現在まで伝えているのかという問題は、解明されるべき重要な課題として残っている。

（注3）『新抄格勅符抄』所載の所謂大同元年牒に見える一七〇社の神封戸数は、八幡神の一六六〇戸、伊勢大神の一一三〇戸、大和神の三二七戸の順となり、一〇戸未満が一一九社となっている。

（注4）これは、明治時代初期の平部喬南『日向地誌』が参考にしたもので、天明三年（一七八三）以降に成立し弘化三年（一八四六）書写されたものを一九三五年に宮崎県寺社兵事課が謄写したものである。

参考文献

新井大祐　二〇二二「八幡」（伊藤聡・門屋温監修『中世神話入門』勉誠出版）

飯沼賢司　二〇〇四「鎮護国家の神の出現」（『八幡神とはなにか』角川書店）

伊藤聡　二〇一六「神祇信仰のなかの八幡」（黎明館特別企画展『八幡宮の遺宝』図録、以下『図録』）

勝目興郎　二〇二三「弥五郎どんの伝説・伝承」（本報告書第六章第三節）

栗林文夫　二〇一六a「南九州の八幡信仰と八幡神社」（『図録』）

栗林文夫　二〇一六b「八幡神が造った島－古代・中世の「桜島」試論」（『図録』）

段上達夫　二〇〇七「総説」（宮崎県都城市教育委員会山之口生涯学習課編『日向の

弥五郎人形行事調査報告書』、以下『都城報告書』）
竹森友子・永山修一・原口耕一郎　二〇一九「第6章　隼人と大隅国」（『姶良市誌　第1巻　先史・古代編　自然編』姶良市）
中島勇三　二〇一一「弥五郎どん巨人伝説の分布状況」（『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』曽於市教育委員会）
中野幡能　一九八五「応神八幡の信仰」（『八幡信仰』　塙書房）
早川万年　二〇一八「官社制度の展開」（岡田荘司編『古代の信仰・祭祀〈古代文学と隣接諸学7〉』竹林舎）
日隈正守　二〇一一「正八幡宮（大隅正八幡宮）石体事件の歴史的意味に関する一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』第六二号
日隈正守　二〇一四「大隅正八幡宮領の形成過程」（『古代文化』第六六巻第二号　通巻五九七号）
日隈正守　二〇一六「九州地方における八幡宮勢力の拡大過程」（『図録』）
森田清美　二〇〇七「南九州人形行事にかかわる王面類」（『都城報告書』）
矢口貴子　一九七八「大人弥五郎譚」（『昔話伝承研究』第七号）
柳田国男　二〇一三「大人弥五郎」（小松和彦校訂『妖怪談義』　KADOKAWA　初出は一九一七年）

第三節　近代の弥五郎どん

江戸時代の末期は、西洋諸国の来航や国内諸藩が改革的藩政に乗り出すなど混乱の様相を呈して来た。幕末に討幕派と佐幕派が対立し、ついに戊辰戦争（一八六八年）が勃発し、討幕派が勝利して政治的権力を掌握した。明治時代の幕開けである。

この戊辰戦争の途中に鹿児島藩からは本府や各郷などから軍隊が編成され出動した。その末吉郷のうち伊勢氏の私領となっていた岩川（五十町村と中之内村）から私領五番隊が遠征した。東北において庄内藩の関川において合戦となり、戦果をあげた。そのことが因（もと）となって帰国後に末吉郷から独立して岩川郷として成立することとなった（明治二年）。これは岩川の人々にとってはかなりの高揚感になったことが想像され、岩川八幡社や弥五郎どん祭りもその精神的存在感を再認識したであろう。

一　明治時代の弥五郎どん祭り

(1)　記録的に最初に見えるのは、『薩隅日地理纂考』（明治四年＝一八七一）である。この時は岩川郷となっており、大隅国贈於郡に属していた（末吉郷は日向国諸縣郡に記載あり）。内容は江戸時代後期の『三国名勝図会』（天保十四年＝一八四三）とほぼ同様である。

例祭「十月五日」―濱下ノ式―大人ノ形ヲ造リテ先拂トスー身ノ長一丈六尺―梅染ノ単衣―大小刀―四輪車ノ上―大人弥五郎ト称フ或ハ武内宿祢トモ云　などある。

日向国諸縣郡山之口郷の的野神社について同書は、「祭日十月二十五日

―濱殿下リ―長一丈余ノ偶人―大キナル両刀―朱面ヲ被セ―四輪車ニ乗セ―神輿ノ先ニ曳ク―大人弥五郎ト号シ」とある。現在の形相と変らない。祭日が今は岩川も山之口も十一月三日になっている点が変更点である。

日向国那珂郡飫肥郷（現在、日南市飫肥）の田ノ上八幡について、『日向地誌』（平部嶠南、明治十七年＝一八八四）に「明治以来ハ祭日モ一定セズ…唯偶人弥五郎ハ旧ニ依レリ」とある。そして「長一丈有余ノ偶人ニ、衣袴ヲ着セ、長刀ヲ帯ビ、右手ニ長槍ヲ杖ニツカシメ、之ヲ四輪車ニ載セ、群童ニ挽カシメ…」とある。祭日はかつて十一月二十三日であったが、最近は十一月第二日曜日に変更されている。

(2) なお、明治四年（一八七一）は廃藩置県が断行された年でもある。鹿児島県や宮崎県の設置ないし区域などその後に変更があった。政治的改革と同時に宗教的変革も大きく、幕末から明治初年は廃仏毀釈の運動が盛んで、八幡信仰のうち本地垂迹説は排斥された。岩川八幡の神宝である神鏡の背面に阿弥陀如来の梵字種子キリークが墨書されたものが現存し確認されている。しかし、『神社誌下』にある京都で刻彫された本地仏はこの時に破壊されたのであろうか現在は存在しない。

(3) 明治時代の前期に、西南戦争（明治十年＝一八七七）が勃発し西郷軍は退却の途次に岩川を通過し、末吉から都城へと退く。岩川付近では政府軍の追撃により激戦もあり、現在「官軍墓地」も存在する。薩軍や政府軍も当時平地にあった八幡神社を目標に兵営拠点と考えたと思われるが、言い伝えではこの戦いに神社は火災で焼失したと思われる（大隅町誌に「社殿は明治十年役直後の建築」とある）。そうすれば弥五郎どん祭りも影響が及んだことが考えられる。

(4) 明治三十七年（一九〇四）には日露戦争が始まり、同三十八年に日本海海戦に勝利し終結してポーツマス条約が締結された。日本は戦勝したとして国際的立場が強まったとされる。こうした中に岩川八幡では弥五郎面が新調されたとされ、現在も使用されている。京都で制作され縦長約八十センチの阿形（飛出面）である。いわゆる白面で額には突起がある。

かつて使用されたと思われる古面は縦長約六十四センチの吽形（べしみ面）である。この方は現在は修復されて茶色に近い肌色であり、やはり額に突起がある。八幡神社では社宝として大事に保管している。

新面の制作年は明治三十八年頃と考えられるが、制作者は不明である。古面の制作年・制作者はともに不明である。新面より小型の古面に伴う像体の身長は不明だが、『神社誌下』（一七六八～九年頃の記録とされる）に「長四尋（ひろ）」とある。古面については大正四年（一九一五）に最初の修復が行われている。

(5) 明治四十二年（一九〇九）に「岩川市場規約」が都城・志布志小間物商同業組合によって作成されている。弥五郎どん祭りに出店する規約で、都城組合員六名・志布志組合員四名で締結し、翌四十三年から履行し場所などの取り決めを行った。祭りの賑やかさを盛り上げる重要な役割であり、今でも元八幡には小字「市ノ後」が残る。

(6) 明治四十三年（一九一〇）には、岩川八幡社に六社が合祀された。郷社としての地位がさらに強化された。六社は伊勢神社（新田場）、藤

原神社（竹山）、笠祇神社（折田）、宇佐神社、保食神社（以上、西山）、熊野神社（上馬場）である。石清水八幡宮との結び付きがあるところに、宇佐神社も勧請されていたことの由来は不明である。

二　大正時代の弥五郎どん祭り

(1)　大正三年（一九一四）九月に、岩川八幡は中之内村川崎から五十町村の馬場へ移築移転した。元の場所は菱田川（後川とも言う）と前川の合流地点で出水のおそれがあったり、道路もせまく祭祀に不便であったので合祀前の熊野神社跡に移した（『大隅「八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』）。

このことで祭り関係では、弥五郎どんの製作や浜下り場所の変更が生じたようである。弥五郎どん本体の製作は宮仕（ミヤダチ）がおり指導して組み立て作業は馬場の青年団が協力したであろうが、衣装についてはそれまで縫薗（ヌイノソン）と言われた吉井集落から馬場集落へ引き継がれたようだ。その後も時代の移るにつれ度々変遷して来ている。

また、浜下り式も元八幡のときは菱田川と前川の合流地点まで約一町であった（『三国名勝図会』）が、神社移転に伴なって馬場三文字（現在の浜田文宝堂前）までの約百㍍となったようである。

(2)　岩川地区の電線架設

大正五年（一九一六）、月野の久保崎発電所から送電が開始され、岩川市街地に電線が架設されてゆくが、弥五郎どんの高さが台車を含めると約六㍍あることから、浜下りに大きな影響があったと考えられる。浜下りのとき、障害のあるのは参道の坂や鳥居の高さなどがあり、そのうち電線は今日でも弥五郎どんの頭上の鳥形部が触れ、守り役が弥五郎どんの肩に乗り棒で持ち上げようやく通過している。

(3)　大正年間の記録類

個人の日誌や行事の記念写真が確認されている。

月野の青山家の日誌に、大正七年（一九一八）・同九年・同十一年・同十三年の十一月五日に矢（弥）五郎殿を見にいったことが各々記述されている。なお、月野の村社（太田神社）の例祭（放生）が十一月三日にあり当家は休業している。当時はこの頃に小学校の運動会があったことも書かれている。

又、大正十三年（一九二四）の弥五郎どん祭りの最古と思われる写真が確認されていたが、最近大正五年（一九一六）の新聞記事の中に予告写真があるという。

(4)　民俗学研究

柳田国男は、大正六年（一九一七）の『郷土研究』四巻十号に「大人弥五郎」を発表している（現在、『定本柳田國男集』第四巻（新装版）に収録されている）。そこに「…海南二州の大人に在っては更に重要なる後日譚の付随して居る…彼の地方のいひ伝へでは、大人弥五郎は終に殺された…」と述べ、「…弥五郎の御霊といふ思想中に、国魂即ち先住民の代表者ともいふべき大人に対する追懐若しくは同情を包含…」と見ている。

(5)　国鉄志布志線の岩川駅開通

明治中頃から大正期にかけて、岩川周辺では開田工事が多く進められ、また道路や石橋の架橋がさかんに行われていて、生活の豊かさや交通の

利便さが認められる。そして大正十三年（一九二四）には都城～岩川間の鉄道開通もあり、さらに岩川村も町村制の岩川町となり、町内も活気がみちていたと思われる。とくに鉄道開通は弥五郎どん祭りの見物も各地から大幅に増えていったであろう。

三　昭和終戦までの弥五郎どん祭り

昭和（一九二六～）に入ると、日本を含め世界は軍靴の音が激しく、民衆も戦争体制にいやおうなく入らざるを得なかった。

そんな中、岩川八幡神社の整備は進められており、弥五郎どん祭りも行われて当時の写真が残されている。

(1)　神社の新築

前述のとおり、社殿等は西南戦争（一八七七年）後に建てられ、大正三年（一九一四）に現在地に神社の移転遷座を行ったが、この時には社殿は移築されたと思われる。

昭和十二年（一九三七）に至り、神社の敷地（馬場城跡で熊野神社跡と言われる）を五㍍ほど地下げをし境内を整備するのに伴ない、社殿が老朽化（築約六十年と思われる）していたので新しく改築に着手した。完成は翌年昭和十三年十月十四日で、新社殿への遷座が行われている。

(2)　また、例祭日がこの年から旧暦十月五日から新暦十一月五日に変更

されている。この頃は当地方では稲刈りや籾落としもほぼ終り、収穫を神に感謝する豊祭（この地方ではホゼと称する）が各神社でも行われる。岩川八幡でも昭和十年代とされる弥五郎どんの写真も数枚確認されており、戦前・戦中にも弥五郎どん祭りは実施されていた。

この時期の弥五郎どんの台車は、木製で車輪も木製の四輪であり、竹籠の胴体が台座に跨るような造作である。

(3)　鳥居の建て替え

昭和十五年頃、鳥居を建て替え、高さが低くなったという。弥五郎どん人形の大きさに影響を与えたと思われる。このことは再度検証が必要と思われる。

(4)　戦争末期

弥五郎どん祭り一式を、米軍の空襲による攻撃から保護する為に、土成公民館に避難させたという。

(5)　昭和二十年

終戦（八月十五日）の年の弥五郎どんの人形と神社および祭り関係者の記念写真がある。この時点では弥五郎どんは大小二本の刀を腰に差している。

(6)　民俗学者折口信夫の研究発表

折口信夫は昭和四年（一九二九）四月に『民俗芸術』第二巻第四号に「偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」を発表している（現在、『折口信夫全集』第三巻に収録されている）。その中で、

八幡神の信仰が、宣伝せられて行く中に、地方々々の神々を含んで行った。それ等の神神は、巨人の形をとって、其土地の八幡神の信仰を受け持つことになった。…譬へば、日向岩川八幡神の大人弥五郎の様なものが出来た。さうして、此が八幡神の行列には必、伴神として加はった。

と述べている。昭和初期の弥五郎どん祭りの写真も添えられている。

四　まとめ

明治時代初期から昭和の太平洋戦争終結までを見てきたが、この時期は岩川の町が大きく繁栄した時期でもあった。岩川郷の成立から岩川村そして岩川町として行政上も変遷し、特に大隅半島北部の中央に位置しており交通の要衝にあたり、鉄道や道路の整備に伴ない曽於郡の経済的な中心部にも発展していった。それを支える経済人も多く輩出し、また新聞や写真によって弥五郎どん祭りも内外に知られるようになり、岩川の町全体が活気づいた時期と言えよう。

このように国内や当地域の農村地帯は、農産物の増産がみられた。秋の収穫が終わり、当地では「ホゼ」（豊祭のこと）と称して各神社のお祭りがあるが、その中心的存在として八幡神社の弥五郎どん祭りは農民の慰労の楽しみの少ない地方では慰安になったり、豊作感謝の対象となり、より身近な信仰の拠り所となったであろう。

《参考文献》

・大隅町誌編纂委員会『大隅町誌（改訂版）』一九九〇　大隅町
・校訂原口虎雄ほか『薩隅日地理纂考』一九七一　鹿児島県地方史学会
・編集大隅町文化財保護審議会『大隅町の文化財』二〇〇五　大隅町教育委員会

第四節　戦後の弥五郎どん

太平洋戦争（昭和十六～同二十年）後は、政治体制の変革や食糧難など人々の生活は厳しい状況であったとされるが、弥五郎どん祭りに関しては地域民の思い入れが強く、終戦の年（昭和二十年）にも開催され、その弥五郎どんの立ち姿の写真も残されている。戦争の敗北という結果に、早くも地域の生活や今後のあり方に元気を出そうという意気込みを込めた祭りであったのであろう。戦争末期には弥五郎どん一式も被害から守るため近くの土成公民館に疎開させたという。地域にとってはなくてはならない存在であったことによる。

ここでは、戦後の中で弥五郎どんが注目され、祭りが地域民の誇りとして盛大に成長していく過程を追って述べることとする。

一　終戦直後のようす

(1)　昭和二十年は終戦直後にもかかわらず、弥五郎どん祭りは地域復興のシンボルとして開催されている。前述のように当時の弥五郎どんの写真が残っている。

昭和二十一年になると、五月に宗教法人令により神社は法人となり、社司は宮司と称するようになった。

なお、この年から銃砲等所持禁止令により弥五郎どん人形への帯刀は出来ず大小刀は県庁に没収された。このことは記念写真によって丸腰の姿が確認できる。この状態は昭和二十六年九月にサンフランシスコ平和条約が成立するまで続いた。したがって昭和二十五年までは丸腰のままである。この当時の国際情勢を弥五郎どんの写真に見ることができて非常に貴重な写真となっている（一九四ページ参照）。昭和二十六年写真に

は帯刀に復帰した弥五郎どんの写真が確認できる。

(2) 弥五郎どんの衣装の布や着物を縫う集落の変遷について、牧島知子氏が「弥五郎どんの衣装とホゼ料理」『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』所収（平成二十三年曽於市教育委員会）に触れている。その中に、昭和二十五年に隣の末吉町から岩川駅前に移転して来た京屋呉服店が商売繁盛のお礼に布を寄贈するようになった、と記録している。始められたのは昭和二十七年からのようである。

(3) 昭和二十八年

この年は神社にとり、変革の年であった。

第一に、宗教法人法が施行され、宗教法人八幡神社となった。

第二に、宮司の交替があり終戦直後から末吉の人が宮司となっていたが、岩川町出身の宮司（第三六代）就任となり、氏子との親密度も増したであろう。

第三に、祭りは十一月五・六日（昭和十三年に新暦十一月五日になっているが、この年から両日開催）となった。弥五郎どん祭りは五日、祭祀は六日となった。この頃は弥五郎どん祭りのお旅所は電線などの支障から変更も多く、岩川駅前（桑原病院跡で、現在の鹿児島銀行の駐車場）まで行ったりもしたが、昭和三十一・三十二年は岩川小学校校庭までであった。

第四に、岩川町商工会が発足して、弥五郎どん祭りの協賛行事は商工会が取り仕切るようになった。

(4) 昭和三十三年

弥五郎どん祭りの運営団体（弥五郎どん本体作りや浜下りなど）が馬場同志会（青壮年会）から麓青壮年会へ引き継がれた。

これまで大正三年から馬場青年団が運営し、昭和二十年頃は馬場同志会（青壮年会）が実行していたが、若者たちの減少により区域を拡大して（森園集落を加える）運営に当たることになった。

この運営のことについて、別の情報が出されている。それによると、昭和三十二年までは馬場青年団が実施し、同三十三年から馬場同志会になり、同三十六年から麓青壮年会へ引き継いだとする証言である。青年団だけで不足する人員を集落の壮年部に加勢をもらい、更に不足するようになり隣の森園集落から応援をもらい、昭和四十一年段階では商工会青年部に引き継いだと思われる。馬場・森園の青壮年部も商工会青年部の会員でもあり、岩川全体が協力して運営に当たり実施することにしたのであろう（野口久夫氏談）。年次については今後に再度確認作業を行いたい。

(5) 昭和三十五年

岩川町は昭和三十年に、恒吉村・月野村と合併し大隅町となり、遅れて野方村の一部荒谷地区も大隅町に編入した。

それを受けて、昭和三十五年に大隅町商工会が発足し、岩川町商工会の運営を引き継いだ。その中に弥五郎どん祭りの協賛行事も含まれていた。

又、奉納行事として武道大会などが行われるようになった。伊集院忠雄氏が三道会（剣道・柔道・相撲）をリードし、のち弓道も加わったという（澤俊文氏談）。

この頃は学校も休みか半ドンで、鉄道やバスも臨時運行されたりで、

露天商も数多く（百五十店前後という）人々がごった返した。

(6) 昭和四十一年

昭和三十三年（あるいは三十六年）に麓青壮年会に引き継がれた弥五郎どん祭りは、昭和四十一年に大隅町商工会青年部へ引き継がれた。この頃、集落の若者は中・高校を卒業と同時に都会へ就職したり、大学など進学のために、郷里を離れていったことが背景としてあげられる。

(7) 昭和四十三年から同四十八年の頃

昭和四十三年には岩川駅前に大隅中央公民館が落成し、町民の生活改善や文化活動に大きく寄与することになった。そして弥五郎どん祭りの浜下りも一時は公民館に一泊するということもあり、翌六日の午前中に帰った。

昭和四十五年には弥五郎どん祭りの浜下りを安全かつ労力を減らすために、神社の石段を一部セメント舗装にした（それまでは石段にシラスを積んで通した）。さらにその際、木製の台車を軽トラックの車体（近時の調査では中型トラックのシャーシと判明）を利用した台車に改造し、巡行のときの便宜をはかり途中が楽になったようだ。

昭和四十八年には祭日を変更し、十一月三日（文化の日）を弥五郎どん祭り、四日は中の日、五日を豊祭（例祭）とした。この変更は志布志のお釈迦祭りの変更を参考にしたという（澤俊文氏談）。祝日を利用して、祭りの執行や見物が容易になるようにしたと思われる。

(8) 昭和五十年代

昭和五十七年には弥五郎太鼓が購入され、地区若者の集団が保存会を結成し、地域の活性化のため活動を始めた。各種イベントに参加すると共に、祭り当日は参詣者に演奏披露をしている。この地区の誇りである弥五郎どんの名称を冠する地域づくりの端緒となった。

国道二六九号線の陸橋化が進められ、県道志布志福山線（六三号線）の上にバイパス工事がされ昭和五十九年三月には完成した。この影響で前年の昭和五十八年十一月は工事中のため、浜下りの順路は変更されたのであろう。

なお、この陸橋工事に当り、巨人弥五郎の身長が議論されたのであろうが、結果的には現在のとおり陸橋通過の際は、弥五郎本体を後に倒して通過することになった。それが今日では見物者には逆に人気の的になっている。

(9) 昭和六十年代

昭和六十年頃は当日の準備状況は、午前二時が起こし太鼓、午前三時から組み立てとなっている。弥五郎どん組み立ては商工会青年部が作成し、以前の宮仕（ミヤダチ）という伝統的神社奉仕者たちから離れて行なうようになっている。

昭和六十一年十月は、弥五郎どんと弥五郎太鼓が大阪御堂筋のパレードに出場した。これが機縁か九月には関西弥五郎会が結成されている。

昭和六十二年三月は、国鉄志布志線が廃止され、道路整備に伴ない物流や人々の交通手段の変化が顕著となった。弥五郎どん祭りの見物にも多少の影響があったと思われる。この頃からは全国と同じく地方の過疎化が進行してゆく時期に入っていった。

昭和六十三年三月には「大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」が県指定無形民俗文化財となり、一層地域の人々の精神的拠り所となった。

なお、この年の弥五郎どん祭りは昭和天皇の病状悪化のため、祭りは神事のみを実施した。国内の祭りはどこも自粛という状況であった。年を越して昭和六十四年一月七日に天皇は死去し、昭和の時代は終焉を告げ新しく平成の時代を迎えることになった。

⑽　平成時代の弥五郎どん祭り

平成元年（一九八九）の頃は、国内経済は活発で各地で大きなイベントが開催されるようになった。

平成二年十月には岩川の弥五郎どんも宮崎県日南市の飫肥城下祭りに招待され、山之口と飫肥の弥五郎どん（様）が初めて三体揃い踏みし、城内に展示された。

平成四年七月には、スペインのバルセロナで開催された世界巨人博覧会に遠征を果たしている。

平成五年八月には都城市の都城盆地祭りに出場し、ここでも岩川・山之口・飫肥の弥五郎どん（様）の三体揃い踏みが実現している。同年十月には大阪御堂筋パレードに招かれ、弥五郎どんと弥五郎太鼓が二回目の出場を果たしている。

平成七年十月にも大阪に三度目の出場をしている。同十一月に大隅町制四十周年を記念して、「弥五郎音頭」の歌も作られた。

平成八年（一九九六）十一月、岩川の丘（県合同庁舎の裏）に「弥五郎伝説の里」が完成し、弥五郎どんの銅像（全長十五㍍）が建ち、また弥五郎記念館も開館し、弥五郎どん祭りの展示がなされた。

平成十二年八月に、北海道の旭川市で開催された第八回地域伝統芸能全国フェスティバル「北海道日本の祭り」パレードに参加した。

平成十六年三月、九州新幹線開業（鹿児島中央駅～新八代駅の間）のイベント（鹿児島市）パレードに参加した。

この頃、全国のイベントやフェスティバルに招かれたり出場の機会が増えている。相当に知名度があがり、その巨人性に注目がされている。

平成十七年（二〇〇五）七月一日に、曽於郡八町のうち大隅町は末吉町・財部町と合併し新しく曽於市が誕生した。市のシンボル的な存在として広く市民に親しまれることになった。十一月の市民祭の末吉会場に登場した。

平成二十年五月、東京おはら祭りで明治神宮参道をパレード、翌日は渋谷道玄坂に於いておはら祭りのパレードに参加した。

平成二十二年（二〇一〇）一月、子弥五郎と孫弥五郎の製作を試み、弥五郎本体の製作継承に取り組む。同三月には東九州自動車道の曽於弥五郎インターチェンジ開通記念に参加している。インターチェンジ名はほとんど地名が使用されるところ、当地の伝説の巨人名を使用したことは稀有のこととされる。

平成二十三年三月、曽於市教育委員会は『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』を作成し、総合的な観点から弥五郎どん祭りを検討し結果をまとめて出版した。この年、神社社務所を改築。

平成二十四年、衣替えの年。これまで地元集落の女性部が担当してきたが、高齢化で今回から町内より縫い子を依頼する。十六名が集まる（経験者三名）。

平成二十八年、弥五郎本体の作り替えの年。竹細工職人の高齢化のため、今回から弥五郎どん保存会製作部により製作する。

平成三十一年三月、「岩川の弥五郎どん」が国の記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財に選択される。

令和二年（二〇二〇）は新型コロナ感染防止のため祭りは中止。神事

のみ実施する。なお、弥五郎本体は作り替えの年で、保存会制作部では竹へぎのための中古機械を購入して製作した。

令和四年（二〇二二）、三年ぶりの本格的な弥五郎どん祭りの実施をすることができた。又、山之口や飫肥の弥五郎どん（さま）祭りも開催された。

二　まとめ

以上、戦後は昭和期までは地方的豊祭の様相が感じられていたが、平成以降の情報化の進展によりその巨人性がアピールされ、その影響で各地のイベントなどへの出演依頼が多くなった。より観光的色彩も強くなってきている。

その中で、岩川八幡神社はもちろん、弥五郎どん保存会などの努力で弥五郎どん本体の製作技術の継承や弥五郎どんの衣装製作が女性部の努力で継続されたことは特筆すべき成果である。この地域の弥五郎どんに対する思い入れが極めて強いことの証であり、今後の祭りの礎となることを念願したい。

《参考文献》

・大隅町誌編纂委員会『大隅町誌（改訂版）』一九九〇　大隅町
・『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』二〇一一　曽於市教育委員会